

現代日本の反レイシズム運動に関する実証研究 (4)

—反レイシズム運動におけるジェンダー・イシューの顕在化潜在化—

東京大学大学院学際情報学府博士課程 清原悠

1 目的・方法

2000年代以降、日本でも「在特会」に象徴されるような現代型の排外主義・レイシズムの動きが表面化した。昨年の2013年はそれらに街頭で直接対峙する「カウンター活動」が初めて大規模化に立ち上がった点で注目に値する年であった。反差別を表明するカウンター活動には2月に組織的にカウンター活動をする「しばき隊」の結成を端緒に、組織されていない人々も自由に参加でき、排外主義とは対極の友好メッセージを可視化明示化する「プラカード隊」といった活動も存在する。

これらの活動はエスニック・マイノリティへの排外主義デモへのカウンターとして立ち上がったものだが、ヘイトスピーチ・ヘイトクライムはエスニシティ以外の社会的に劣位に置かれがちな属性を持つマイノリティ全般が対象にして行われることも珍しくなく、海外では女性やセクシャル・マイノリティへの暴力をヘイトクライムとして捉える議論も存在する (Gill and Mason-Bish 2013)。日本でも反レイシズム運動にはジェンダーの問題に関わる活動をしてきた人々も参加しているが、それは上記の問題意識を持っているゆえであると考えられる。そこで、本研究では運動参加者への聞き取り調査を行い、その参加（あるいは離脱）の要因と、運動全体のフレーミング、ダイナミズムとの相関の分析を試みる。

2 結果・結論

調査の過程で見えてきたのは、反レイシズム運動が立ち上がった当初には参加していたが、途中で離脱していく者もいたという点であり、それは運動全体のフレーミングや、運動のラディカル化に関係していた。しかし、他方で運動のなかに留まり続け、ジェンダーの視点を組み込むことを模索してきた参加者も存在する。以上の論点は、①シングル・イシューのなかにおいて、そもそも何を「イシュー」として見なすかで争いがあること②活動の参加/離脱はイシューのみではなく人的紐帯といったものに左右される点、この①②が複雑に絡み合っている事を示している。①の論点は、主に運動の目的（ゴール）として何を重視するののかの関係で争われていると考えられる。他方で、②の論点は運動を形成するにあたって、人的紐帯の強さ-弱さと、運動参加への来歴に関わっていると考えられる。

2013年にカウンター活動が活発化した結果、排外主義運動への参加者は減少している。その結果カウンターに忙殺されていた昨年に比べて、2014年は反レイシズム運動の側におけるフリーハンドが高まっていると言えるが、カウンター運動から始まった活動がどのように展開していくかを見る上で、ジェンダーの視点がどのような形で顕在化/潜在化をしているかを見ることは学術的にも重要な論点であろう。

文献

McCarthy, J. D. and M. N. Zald, 1977, "Resource Mobilization and Social Movements: A Partial Theory," *American Journal of Sociology*, 82(6), 1212-41.

Aisha K. Gill and Hannah Mason-Bish, 2013, "Addressing violence against women as a form of hate crime: Limitations and possibilities," *Feminist Review*, 105, 1-20.